

# 東三河 地域研究

平成27年9月10日発行  
編集・発行：  
公益社団法人東三河地域研究センター  
住所／豊橋市駅前大通二丁目46番地  
(名豊ビル新館6階)  
TEL／0532-21-6647  
FAX／0532-57-3780

通巻132号 2015.5

公益社団法人東三河地域研究センター

東三河地域問題セミナー第1回公開講座

「映画ロケ(WOOD JOB!)を契機とした地域おこしの取り組み

～映画ロケで山が元気になった～」

前津市役所美杉総合支所地域振興課長

現津市役所農林水産部水産振興室室長 田中 稔 氏……………2-12



平成27年5月25日開催 東三河地域問題セミナー第1回にてご講演される田中稔氏

公益社団法人東三河地域研究センター 東三河地域問題セミナー第1回公開講座

講演：「映画ロケ（WOOD JOB!）を契機とした地域おこしの取り組み～映画ロケで山が元気になった～」

前津市役所美杉総合支所地域振興課長 現津市役所農林水産部水産振興室室長 田中 稔 氏

平成27年5月25日（月）14時～16時30分 名豊ビル7階ホールCにて講演を行った。

講演「映画ロケ（WOOD JOB!）を契機とした地域おこしの取り組み～映画ロケで山が元気になった～」

前津市役所美杉総合支所  
地域振興課長  
現津市役所農林水産部  
水産振興室室長

田中 稔 氏



1. はじめに

津市役所農林水産部水産振興室の田中と申します。もともと三重県一志郡美杉村という面積 206k ㎡、森林 90%のところ生まれ育ちました。私の家が大洞山という奈良県と三重県のちょうど境目にある標高 500m くらいのところにあり、学校を出て美杉村に勤めることになりました。平成 18 年の津市との合併前までは観光係や農業共済事務組合への出向、また久居市と一志郡 6 町村による介護保険広域連合への派遣等、一つの村よりも、近隣の方々と出会う場面が多かったことが、自分の役所の中での感じ方、

考え方が培われてきたという気がします。

2. 映画撮影に協力したきっかけ

私の幼なじみに三重県職員がいて、彼から「美杉で映画を撮るかもしれないので、美杉を紹介してあげてくれないか。撮影となるといろんなところで大騒ぎになるので、まずオフレコでやってくれないか。」という話がありました。なぜ美杉に決まったかといいますと、三浦しをんさんという『まほろ駅前多田便利軒』の小説で直木賞を受賞し、最近『舟を編む』という作品を書かれた方のお父さん、おじいさんが美杉村の生まれだったからです。

お父さんは国文学者で、その方が娘のしをんさんと、時々田舎へ帰ってきて、しをんさんがその見聞きした部分を『神去なあなあ日常』という作品にされました。

それから、映画制作会社のジャンゴフィルムの取締役が三重県津市の出身の方で、その方と三重県の職員や津市の幹部職員が同級生だったということで、美杉に来ることになり、私が案内することになりました。



図1 WOOD JOB! ロケ地観光マップ

当時私は美杉総合支所の地域振興課長という立場でしたが、本来の公務の中で、一日ロケ地探しをすることはなかなか難しく、あくまでもプライベートということで休みをとり案内しました。私の職務は地域おこしの他、総務課長も兼ねており、さらに知事選挙の事務もしていましたので、有給休暇や土日を使いながら案内しました。

自分の中で気になったのは、職員として、例えば時間がありませんからできませんと断ることもできたと思いますが、楽しいことをしたいという思いがありました。そこで、職場には事情説明をして、夜に打ち合わせをしたり、地域の方々に映画になるかどうかわからないけども、ロケ場所候補として見せてくださいというように接触していきました。

監督が矢口史靖監督といいまして、「ウォーターボーイズ」、「スウィングガールズ」、「ハッピーフライト」という映画を撮られた方です。私が出会う前は「ロボジー」という、ミッキー・カーチスさんがロボットの役をする楽しい映画を撮られております。私は2012年の4月に3日間、矢口監督とプロデューサーとあちこち回りました。

撮影現場の説明を写真でしますが、すべてスタッフから私がいただいたものです。それぞれの俳優さんには肖像権がありますので、私どもが写真を撮ることはできません。ただ、市の広報担当が現場へ行って写真を撮ることについては、プロデューサーが「いいです」と言うのですが、2カ月のロケ中に張りつこうという気はなかったみたいです。本来応援していくのであれば、もっともっとロケにつき合っていけばよかったのですが、どこまで踏み込んでいいのかという判断が役所としては難しかったようです。(肖像権のため掲載はしない)

- ①木材市場のシーンで監督が細かく指示をしているところで、市役所の職員がエキストラで参加してくれています。
- ②小学校のシーンで、子供たちを指導している矢口監督です。
- ③かなりの高所から撮影しており、映画で御神木が山の上から滑り落ち、下の的に当たるといったシーンを撮るためです。
- ④主役の染谷君の研修先となる中村林業は、廃業した製材所を使わせていただき、中村林業という看板もつくっています。
- ⑤メインとなる祭りの前の日のシーンを撮っています。地元の獅子舞の方に協力してもらっています。
- ⑥伊藤英明さん扮する飯田与喜という、染谷君の兄貴分になる男の家で、住民の家を借りています。
- ⑦中村林業株式会社と書いてあるトラックがありますが、これも地元の林業家のトラックを借りて、シ

ールを張っています。

- ⑧祭りのシーンでこれらの旗すべて小道具です。
- ⑨木で組んだレールですが、ここに御神木が落ちてくるとい、ジェットコースターの最終点という場面です。この御神木はすべて作り物で、美術の力というのはすごいものだと思います。
- ⑩長澤まさみさんと染谷君が一番いい感じになるシーンで、この滝を紹介したら、ここにしましょとなりしました。山の中に機材を持ち込んで、そこで映画を撮っています。

実は私もこの映画の中で出演しております。まだ見ていない方がいれば、DVDもありますので、是非見ていただければと思います。

### 3. 映画撮影における地元住民への協力依頼（エキストラ）

この映画に関しては多くのエキストラが必要でした。特に祭りのシーンでは、男性器をイメージした御神木を、ふんどし一丁の男たちが山の上から落として、下に待ち受けている女性器をかたどった藁の御神体にぶつけるという、五穀豊穰、子孫繁栄というイメージの祭りにしたかったのです。そのため5日間くらい、夜も含めて裸になってもらうエキストラを募集しましたがなかなか集まりませんでした。美杉には、祭りなどで裸になる風習がなく、岡山県の西大寺の裸祭りの方々が助けに来てくれました。エキストラ担当者は、メルマガ募集をすれば人は来ますとのんきなことを言っていました。それでは駄目ということで、私たちがいろんな人に声をかけました。

例えば、中村林業の仲間として常時出ている裸の男がいますが、これも10人くらい地元の人に声をかけて募りました。それから女性達にも頼みましたが、私の知人女性に頼んでしまうと私個人が決めたことになってしまうので、まずエキストラ登録をしていただいて、名前を私が確認後、その中のこの人とこの人だったら大丈夫というようにスタッフにアドバイスしました。そして、その方々に直接、「こんなシーンになると思うけどよろしく。」と話をしました。

### 4. 映画撮影における地元住民への協力依頼（撮影場所）

このロケハンをしていくときに、やはり難しいのは、監督やスタッフの思いがいっぱいあり、遠くに山並が見える場所はないかとなると、美杉をあらこちらスタッフを連れて回って探していくのです。例えば、研修センターの場所をどこにしようかということになると、美杉地内の三重大学の林業研修施

設を三重大に使わせてもらえないかと交渉します。

それ以外でもロケの流れの中で、いろんなところをお願いに上がりました。小道具などの製作作業をするために住宅建築業を営む地元企業さんの作業倉庫を貸していただきました。スタッフの宿泊ホテルは、美杉地内にリゾートホテルがあり、とにかく安く貸してもらおうよう交渉しました。ロケの場合は当然弁当が要るので、しかも朝、夜、夜中に関わらず、間に合わせてくれという弁当の交渉もしました。そのほか、山の上を歩くシーンでは、まず、どの山か、持ち主は誰か、所有者と交渉しました。しかし松明を持って上がるという話になってくると、隣山の持ち主にまで声かけなくてはいけないし、消防署にも連絡をしなくてはいけないのです。このようなことが私の役目でした。

「この家を貸してください」「このお風呂を」といっていろんなところをお願いに行きました。風呂だけでも三つ四つ頼みに行き、中を見せてもらって、断られることもありましたが、でも「田中君か、稔君か、久しぶりやな、今日は何の用？」と言われ、「もしかしたら映画ロケに使うときは貸してくれますか？」と言ったら、「ええよ」というように、美杉での今までの人間関係のおかげや、他の町村職員と交流のおかげというのもありました。例えば、映画の中で隣の名張市のスナックを借りる予定でしたが、撮影当日、話の行き違いで使わせないとトラブルになりました。名張市役所の知人に電話をして、彼に交渉していただいて、その隣の家をスナックとして撮影をしたということもありました。私の持っているネットワークというのがかなり役立ったということで、監督からの感謝の言葉が、いまだにありがたいと思っています。

## 5. 映画撮影における行政機関等への協力依頼

このようにロケに関わっていく中で、市としてどういう協力ができるかを徐々に模索し始めます。美杉で撮ることが決まりましたので、まずロケ地をつなぐ市道の脇の枝を払って、撮影用トラックに当たらないようにするなどの下見に私が行きました。個人の山なのかどうか、枝を切ることでトラブルにならないか、下調べも当然しました。それから、緊急時の備品ですが、バルーン式の照明灯が小学校にすべて配備してあるので、教育委員会に許可をいただいて使用できるようにしました。この辺が微妙で、一民間映画会社に緊急用備品を貸していいのか、結果的に、何も起こらず良かったです。それから、健康福祉部にお願いしたのは、撮影場所が病院から遠いので、保健師を派遣してほしいと依頼しました。夜間も待機してほしいのですが、時間外なので朝の

9時から4時半ごろまでならと協力してくれました。この辺が微妙です。市長がこの映画に関して、全面協力する、同じく三重県知事もその立場であったことが大きく、それがなければ恐らくここまでの支援はできなかったのではないかと思います。

ロケ中に、私はぎっくり腰を起こして、腰をかばいつつロケにできるだけつき合うようにしました。数日後、助監督がぎっくり腰になり、彼をぎっくり腰の私が病院に送ったりしました。撮影場所から病院まで大体1時間近くかかるので、病院には、ロケが始まる前にスタッフを連れて救急時にはよろしくお祈いしますと依頼しておきました。

様々な交渉事、撮影に至る部分について、ありがたいことに YouTube で矢口監督がインタビューの中に、染谷君、伊藤さんの演技、長澤まさみさんの話のほか、「この映画は田中さんがいなければ撮れなかった。スーパー縁の下の力持ち。」と言っている。この言葉には未だに感激しています。ロケの中で、例えば許可、承諾の申請、そこに至る交渉、警察、消防との打ち合わせ、必要な物品などできる限り協力しました。役所の人間としてすべきか、外部からみれば、職場からみれば、何でそこまでするのかと疑問を持たれていたと思います。役所として携わる方法があるとしても、果たしてどこまで私個人がやれるのかという、そのものさしをどうするのかは問題です。「田中さんは特殊ですよ」と言われますが、逆に特殊でどこが悪いのかという気持ちがあります。監督に最初に会ったときに「いいところがあったら美杉を使ってください。駄目ならここで撮らなくてもいいです。いい作品をつくっていただくために僕ができることをします。監督の思いがあるところで撮っていただければ結構です。推薦するロケ場所を断ってもらっても結構です。」と言いました。

## 6. 映画撮影中における住民活動の芽生え

映画ロケは雨が多くて、かなりスケジュールが狂います。夜中のシーンでは1時、2時まで撮影し、近所の人にとっては大変怒りたくなるような状況でしたが、それもトラブルが起こらないように地域の人たちに話をさせていただき、映画ロケが順調にいくように、また地域の人たちが快く受けていただけるよう気配りをさせていただいたつもりです。プロデューサーに地元小学生へ「映画とは何か」という講演もしてもらいました。スタッフの方と地域の方たちを何とか結びつけていきたいと思っていました。

それから、後々神去村青年団という映画をきっかけにした地域おこしの団体ができました。これは弁当をつくったり、エキストラで出たり、トラックを

貸したり、エキストラの人たちのお手伝いをしたり、交通整理を引き受けてくれたりする中で、何か地域のために、自分たちができるところをしようと神去村青年団という地域おこしのグループをつくっていただいたのです。



図2 神去村青年団のメンバー

伊藤英明さんが演じた飯田与喜の家として借りた家がありますが、その隣の人が自分の家を控室に提供しました。そして、前の田んぼは休耕地でしたが、スタッフが耕して、田植えをしました。撮影が終わり、ロケ隊が帰った後、隣家の方が稲刈りをし、精米し、監督他スタッフの人たちに送ってくれました。監督もサービス精神たっぷりの方だったので、地域の人たちが監督と一緒に写真を撮ったりして、交流を図っていただきました。

## 7. 映画撮影における方言指導

シナリオづくりが、2012年の秋ごろから始まりました。シナリオのセリフは、私が神去弁に直させてもらいました。例えば、飯田家の食卓で会話される伊藤英明さんと優香さんのセリフがあります。これを神去弁にするということで、私と方言指導の女性の方がテープに吹き込んで、俳優に渡すことをしておりました。2013年の5月の連休に吹き込んで渡したわけですが、当時まだ主演の染谷君しか知らされておらずに、吹き込んだ後からしばらくして出演者が決まると連絡があり、出てきた名前が長澤まさみさん、伊藤英明さんと聞いてびっくりしました。当時染谷君の名前は多くの方が知らなかったと思います。私は、当時海外の映画賞で新人賞を受けており、演技はすごいということは聞いていました。

私は奈良県寄りの美杉育ちで、大学は京都へ行く

ていましたし、妻が和歌山で、言葉もいろんなものが耳に入っているので、純粋な美杉弁ではないと思います。しかし監督から美杉弁でなくて神去弁でいいからということで、発音、言い回しなどを私なりに考えました。三重県知事には優香さんのセリフが結構いいと言っていたと、美杉地域らしいという評価もいろんな人から聞かせてもらいました。

撮影が終わった後、調布に4泊5日のアフレコ指導に行かせていただきました。出演俳優さんが来て、もう一度同じセリフを、画面を見ながら入れるということでした。撮影現場で取った音は一旦消していました。長澤まさみさんが初日の吹き込みだから、田中さん早めに来てと言われていましたが、当日、台風の影響で新幹線が止まり、結局長澤さんには会えませんでした。伊藤英明さんや優香さんや染谷君にはお会いさせていただきました。

## 8. 映画撮影後の行政機関側での働きかけ

いよいよ映画の撮影が終わり、アフレコも終わり、特別試写会も行かせていただきました。それから三重県、津市が再度協力をしていただくようになってきました。まず津市の広報紙に4回、1面に映画の特集をして、ロケ地ツアーやパネル展をやっていますと掲載しました。それから地元の新聞、全国版雑誌の、例えば映画雑誌『ロケーション・ジャパン』に掲載されたり、『神去なあなあ日常』を出版している徳間書店では、特別号を出版しPRしました。一番大きかったのは、県と市が3月の末から4月初めにかけて、山手線1電車を借りきってラッピング広告を出しました。



図3 山手線のラッピング電車の様子

それから、映画が始まったとき、三重森と緑の県民税市町村交付金事業で、「神去なあなあ日常記念館」を美杉の道の駅につくり、記念館事業を41日間しました。県税の有効な使い道ということで、名前は「津市森林・木材利用促進フェア&神去なあなあ日常記念館」という形で、後者の意味合いのほう

が強いですが、考え方は木材の利用促進としてです。

**津市森林・木材利用促進フェア開催**

津市の森林現状 森林や林業・木材の魅力 地域産材の利活用  
 森林の持つ多様な機能の維持と災害に強いまちづくりを促進するため

WOOD JOB! 神去なあなあ日常記念館において  
**津市森林・木材利用促進フェア**を開催

開催期間	平成26年5月2日(金)～5月6日(火・休) 平成26年5月10日～8月31日(毎土・日曜日・祝日)
開催時間	10時～16時(開催初日は13時から、最終日は15時まで)
開催会場	WOOD JOB! 神去なあなあ日常記念館
事業費	370万円(市:179万3千円、県交付金:190万7千円) みえ森と緑の県民税町交付金を活用

図4 津市森林・木材利用促進フェアの概要

**映画「WOOD JOB!(ウツジョブ!)**  
 ～神去なあなあ日常～

WOOD JOB! 神去なあなあ日常記念館オープン  
 & 津市森林・木材利用促進フェア開催



**平成26年5月2日開館**

図5 神去なあなあ日常記念館

映画「WOOD JOB!(ウツジョブ!)～神去なあなあ～」関係展示

巨木セット展示  
 直径2.5m×長さ10m

映画パネル展示  
 撮影記念グッズ展示

神去村ジオラマ展示  
 幅2.1m×奥行き1.2m  
 (6月7日から展示)



図6 神去なあなあ展示の様子(道の駅「美杉」)

ここでの式典では、監督にお越しいただきまして、私は当時水産振興室でしたので行けなかったのですが、監督が市長他多くの来賓の前で、「今日、一番に会いたかった田中さんが来ていませんね。」と仰っていただいたとのこと、一生残る思い出です。

それから、美杉総合支所の独自の事業として、「地域かがやきプログラム」という事業があり、空き家対策事業に取り組んでいますが、その事業に、ロケ地ツアーを取り入れました。美杉はいいところとい

うことをPRして次に美杉に住んでいただくという企画です。15日間を、1日18人定員のマイクロバスで走るので、270人しか参加できないのですが、応募総数が4500人、県外から310人、中には北海道の方もいらしたそうです。「WOOD JOB!」ファン、あるいは矢口監督ファン、伊藤英明ファンが多かったと思います。

**ロケ地ツアーの内容**

本年4月1日にオープンした津市伊勢奥津駅前観光案内交流施設を発着地(9時出発、15時帰着)として、マイクロバスで八幡・多気・下之川地区の13カ所のロケ地を巡る



13カ所のロケ地: 1. 中村林業製材所、2. 行方不明の子供を発見するシーン、3. 神去村入口、4. 直紀の家、5. ヨキの家、6. 山入、7. 伐採研修、8. 丹生優多目的集会所、9. 休憩、10. 台所シーン、11. 道の駅美杉、12. 神去小学校、13. 勇気、ヨキが子供たちと遊ぶシーン

図7 ロケ地ツアーの内容

**ロケ地ツアー参加者募集概要②**

**応募方法** はがき、ファクス、Eメール、津市ホームページ「ロケ地ツアー応募専用ページ」

**募集期間(いずれも必着)**  
 6月分▶平成26年5月16日(金)～平成26年6月5日(木)  
 7月分▶平成26年5月16日(金)～平成26年6月19日(木)  
 8月分▶平成26年5月16日(金)～平成26年7月17日(木)

**事業費(予算)**  
 総額 121万6,000円  
 《内訳》  
 車両運行業務委託料 1,200,000円  
 レクリエーション保険代 16,000円



図8 ロケ地ツアーの参加者募集の概要

また、DVD&ブルーレイを売り出すのに東宝から話があり、もし田中さんが対応してくれるのであれば、ちょっと割安な金額で販売できると言われたので、映画撮影協力者や地元の人たちにお知らせして、豪華版168セット、ブルーレイ22セット、DVD225セットの斡旋をさせていただきました。役所勤めなのにこんなことしていいのかと思いましたが、協力してくれた人に見てほしいとの思いです。中間マージンももらっていないのですが、公務員が民間企業のものを買っていいのか、すごく悩ましいところではありました。

## 9. 映画をみる観客に対する思い

「神去なあなあ日常」という映画はどういう話かというと、若者が学校を卒業後、行くところがなく、親から「田舎に行け」と言われたので、林業の勉強をするために神去村へ来ていろんな経験をしていく中で、彼が山に対してどういう思いを募らせていっ

たのが映画の主題として語られていくものです。決して林業万歳ではありません。そのため、映画を見たなら林業振興につながると思われても恐らく無理だと思えますし、監督自身もそう言っています。ただ、林業という仕事がどういうものなのかを感じてほしいということです。この映画は、特に映画館が近くになく山で暮らしている方に見ていただきたいと思いました。そういう方に見ていただくと、山に携わるとはどういうことか、自分のおじいさん、先祖が山で仕事してきた方もたくさんいると思いますが、そういう方々がしてきたこととはどういうことなのか改めてわかると思っています。

そのせいか、この映画は、三重県のイオンシネマ津、津市の映画館が日本で一番観客動員がありました。営業的には東京が一番でないといけないのですが、三重県の津市の映画館が一番でした。津市の方、美杉の方が二度三度ともう一度見たい、あの景色が出てきたなどの思いから来てくれました。また県内で、あれは見たほうがいいのかというお年寄りの方がいて、社会福祉協議会がツアーを組んで、バスで映画を見に行ったそうです。映画、何年ぶりだろうと言ったお年寄りがいたそうです。

本当に山を育ててきた人間のセリフとして、この映画の主題とと思っている部分があります。染谷君演じる若者が「この山の木、全部切り出しちゃえば億万長者じゃないですか。」と言うことに対して、光石研さん演じる中村林業の親方が「せやから苗木を植え続けて大事に育ててやらなあかん。おかしな商売やと思わんか。農業やったら手間暇かけて作った野菜がどんだけうまいか、食べたもんが喜んだかわかるけど、林業はそうはいかん。ええ仕事をしたかどうか結果が出るんは、おいらが死んだ後なんや。」という言葉です。今年の2月19日矢口監督トークショーが東京であり、染谷君が出るということと、私も招かれ出席したのですが、その時に流れた私の声が、このセリフの部分でした。ふだん農業をしている方にとっては、長くて1年で成果が分かる仕事だと思いますし、大抵のサービス業というのもそうだと思います。当然準備はすべてにおいて必要だと思います。でも林業の場合は、1年先、5年先でなく、50年、100年、150年という年数が要って、それで150年先に果たして高値で売れるかという保証もないのです。毎年換金できればもっと林業も儲かるのかもしれないが。

美杉の山は90%が植林です。戦後、スギ・ヒノキを植林をしていったのですが、今では、小さな林地の持ち主は、枝打ちやら、間伐に経費がかかるわりに、木材が安いので、「山」を手放しています。広い林地を持っておられる方は、立派な木を植えており、

100年生、150年生、先祖から受け継いだ木を売って、売った金にかかる税金を払うためにまた売るといように、何のためにしているかわからないということを知ります。私は林業の専門家でなく、横で話を聞いているだけですが、今年、バイオマスの産業都市認定というのを津市が受けました。山から木を切ってきて、それをエネルギーに換えるためには間伐した木を持ってこるための労務は誰がするのかという課題もあり、そこに補助金を出さなくてはいけない仕組みにもなっているようです。

こういう日本の林業現状を知らない方々を映画のターゲットとするのではなく、今もなお自分の故郷を、あるいは美林として育てていこうという人たちにしてほしいと思います。

この映画は、林業の振興が目的ではなく、林業というものを感じてほしい、考えてほしい映画だったと今思います。先日長野県で北陸新幹線のイベントに立ち寄りしました。富山県が新幹線での誘客効果を目指そうということで富山県の方が参加していました。その方が富山の林業事務所の方で、「ウッジョブ、見ました。おもしろかったですよ。」と仰っていました。「林業」に携わっている方に見ていただきたいと思いました。

## 10. 映画をきっかけにした地域活動への働きかけ

映画の公開があり、津市も三重県もこれをきっかけに、東京・日本橋の三重テラスでパネル展を開催したり、道の駅美杉での記念館もオープンしました。記念館には約1万人が来ていただきました。それからバスツアーもしました。それがどんな経済効果をだしたかですが、例えば「WOOD JOB!」と書いたおもちゃのチェーンソー、神去なあな茶という美杉茶や、美杉の地ビールなどを商品化したのですが、買われた方はそう多くはありません。確かに記念館やロケ地ツアーに来て道の駅美杉で買い物された方が多かったので、期間中100万円ほど売上は増えました。それがずっと続くわけではありません。



図9 映画で商品化したお茶等

経済効果があるのかというと、私は難しいと思っています。映画による効果とは、私の知識では、大林監督の「尾道三部作」や、最近亡くなられた高倉健さんの「幸せの黄色いハンカチ」で夕張に見に行った方も確かにあると思いますけども、果たしてそれがいつまで続くのかというと、やはり従来ある観光資源の方がずっと強いです。映画による地域活性化は、実際はきっかけにしかならないのです。そのきっかけをどう生かすかというのは、そこに関わる人を作れるかだと思います。映画のエキストラで何人もの方々が参加していただき、映画撮影が終わると、公開まで何かできることがないのかという人が何人かいました。そして、次は映画をPRする、応援する、一人でも多くの方に見ていただく活動を今からしようということで、当時のメンバーでは神去村役場という名前で動こうとしていました。私はプロデューサーを通じて監督にそういう人たちに名前をつけてください、とお願いしたら、「神去村青年団」という名前をもらいました。そして、「神去村青年団」という名前ができた、これは監督がつけた名前」と説明したら、それだけで積極的な人たちが集まってきました。役所がつくった団体ではなかなか入ってきませんし、無理に入れた人では実行力がないと思ったので、監督の命名によって、命が吹き込まれた感じでした。

2014年早々、青年団として活動を始めましたが、活動資金がありません。ロケ時に、スタッフが着ていたTシャツのデザインをもらっていたので、市の観光振興課に掛け合って、そのTシャツを市役所の備品として作ってくれないかと頼みました。市役所が100着Tシャツをつくり、それを青年団が使ってPR活動を行うことになりました。

私は当時美杉総合支所にいましたので、そのTシャツ作製、ロケ地ツアー、記念館の予算要求もしました。ただ、財源的には三重県民税や市の地域づくりのための「地域かがやき事業」を使っていたのですが、とにかくやる気のある人たちを集めようと、やる気を見せなければということで、声をかけたら、美杉町外も含めて100人のほどの方が青年団に入ってくれました。

それから、ロケ地ツアーや記念館のガイドを青年団に頼むという企画を提案しました。私は既に水産振興室に異動していましたので、後任に引き継ぎました。今、青年団がどうしているかといいますと、映画は終わりましたが、青年団の方々は自分たちで神去村というシールを作り、イベントで配布をしたり、8月には神去なあ祭という企画イベントをするようです。これも市が支援していますので、すべてが自分たちの持ち出しではないですが、彼ら

は自分たちでTシャツをつくって売ったりもしています。

また、美杉地域はJR東海名松線が、2009年の災害のために不通になっているのですが、来年4月に復旧をするので、JR名松線に乗っていただき地域活性化を促進する意味合いも含めて、神去村青年団、「WOOD JOB!」も連携しようという動きになっています。

### 11. 映画づくりから自主的な地域活動の動き

今後彼らが地域おこしを継続してくれるのかといったら、財源になるものがないとなかなか難しいです。ただ、少なくとも数年はみんな何かしら地域おこしをしようと言っております。青年団の団長は御神木（青年団が保管している）を活かし二人の出会いの神様という形にしたいと言っています。林業家の副団長は、木こり体験ツアーという、参加者が実際に山へ入って木を切る体験ができるイベントができないかと考えています。それからもう一人の副団長は、いろんなまちづくり、地域おこしに携わっていきたいと言っています。最近では、消防団の改革についての話し合いに誘われたので、「他の場面でも、積極的に発言する。」と、言っていました。宿泊地になったリゾートホテルは大きな利益につながらなかったようですが、スタッフやロケ見学に来る人たちとの出会いをきっかけに、施設内で月に一度の朝市「むらのわ市場」で、「より多くの人々との広がりを作っていきたい。」と青年団の事務局長でもある若社長が言っています。

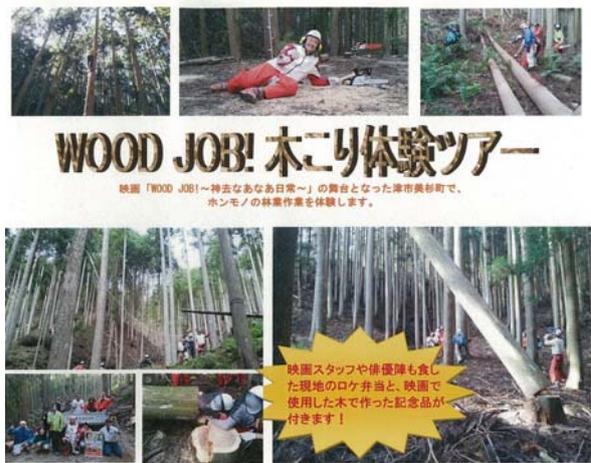


図10 木こり体験ツアー

「飯田家」の隣で、撮影の控室に自宅を提供した方のふすまには、サインがいっぱいです。

矢口監督、主演の染谷将太君、伊藤英明さん、優香さん、長澤まさみさん、光石研さん、田中要次さん、三浦しをんさん、博報堂、TBS等のプロデュー

サー、映画スタッフ等のサインがいっぱい書いてあるふすまを、ロケ地巡りに来た人に自宅開放をして公開しています。また、伊藤英明さんが演じた飯田与喜の住まいの横にロケ地の案内看板を青年団が作りました。JR 東海名松線の終着駅である伊勢奥津駅の観光誘客施設では、「WOOD JOB!」記念本などが置かれており、ロケ風景写真の展示スペースになっています。リゾートホテルの「むらのわ市場」では、映画にでてくる「愛羅武勇」のタオルや、「WOOD JOB!」のTシャツ、当時使った軽トラもホテルが引き取って置いてあります。また、ホテルのロビーには、御神木の模型を置いたり、お風呂を「神去の湯」として活用しています。また、ホテルのそばの飲食店には主な出演者のサインが飾られています。

撮影機材の保管倉庫として旧中学校施設の使用を許可しました。総合支所の図書館に「WOOD JOB!」コーナーとして三浦しをんさんの原作本が、ロビーには、御神木を切ったのこぎりなどの小道具が飾られています。小道具類は、プロデューサーからもらっておくことにしました。本来なら、映画会社が処分するのですが、後日、役立つだろうと判断しました。

青年団の団長は、美杉村の時代に、「村おこし仕掛け人」というグループで、例えば「美杉の味」という、昔から伝わる美杉の田舎料理、伝統料理を本にされたり、また婚活パーティなど地域おこしになることにチャレンジされた方です。今回も青年団のチームをこの方にしようと思いました。私は、団長、現場での副団長、情報発信の副団長、事務局長と、それぞれこの人がいいと思った人に白羽の矢を立て、指名しました。ほかにも、林業関係の、肩書きのある偉い方もいましたが、実行力のある方に、お願いしました。団長の車には、今も「中村林業」、「WOOD JOB!」というシールが、貼ってあります。このシールも自分たちでつくりました。

## 1 2. 映画づくりを踏まえた今後の地域づくりについて

今後美杉地域にとってこの映画がどういう意味を持つのかといたら、何らかの形で関わってくれた方々が中心になって、映画をきっかけに何かをする、林業に対して考えたり行動したりするきっかけになったと思います。ただ、この動きがずっと続くとは思いません。継続は難しいと思います。

まちづくりは地元の人が指導者だと難しいです。転入者の取り組みにより、いろんなことにチャレンジして、地域おこしの形ができ上がってきたという事例が全国にいくつもあります。一方、その地域の

中で昔からいる人がリーダーになっても、なかなか新しいことには着手しないし、二の足を踏むようなこともあるので、地元民とは違う視点を持った方々が地域おこしのリーダーになるのかなと最近、特に感じます。

私の家は国登録有形文化財になっている、茅葺き屋根の家です。私の里は美杉町三多気とありますが、昔修験者が開いた山で、真言宗のお寺があります。1400年代に京都から大名として伊勢に来た北畠氏が祈願所として、この真福院にお参りするとき山桜を植えたといわれており、日本桜の会の名所百選に選ばれました。これが「美しい日本のむら景観コンテスト」農林水産大臣賞を受賞し、それから毎年春には多くのカメラマンがきます。この桜の並木道に私の茅葺き屋根の生家があり、国登録の有形文化財になっており、これを守っていこうと思っています。癒しを感じてくれる家として活用できたらいいと思っています。民宿経営をするつもりはなく、会員制で1週間だけ貸したりする方法がいいと思っています。

私は小さいときは茅葺き屋根の家を、友達に自分の家と言うのが嫌でした。友達の家は、ほとんど瓦の屋根になっていましたので、恥ずかしく思っていました。現在、日本の原風景が見直されて、いいと思う人々がいます。最近、近くに民宿ができ、その主人が洋食皿を使っていました。それよりも昔から家に伝わる皿や、お椀を使えばいいと提案しました。器で味が変わるわけではないのですが、その味わいを生かすことが大事だと思います。

美杉の観光地をロケ地にと監督に提案したら、観光地ではなく、ごくありふれたところを入れたいと言われました。この映画をきっかけとした地域づくりには観光地は相いれないのです。普通の景色が、所が映画ロケ地になっても、観光資源としての活用は難しいのです。映画を地域おこしのきっかけにする場合は、その場所ではなくて、そこに携わった人たちが地域活性化の動力になるように仕向けないといけないと思います。

最後に、私は市役所職員であって、いろんなジャンルを持ちながら、映画を通じた地域おこしにかかわってきました。『ロケーション・ジャパン』という映画専門雑誌で、津市がロケ支援度部門をいただきましたが、滋賀県が「るろうに剣心」で大賞をもらっています。滋賀県でもそれをいかに誘客とか経済的効果に結びつけるかが課題だと思います。先日、の雑誌社の企画で、ロケ地の市町村が集まり、こんないいところがあるというブースを出し、映画にちなんだ食品も販売できる企画が行われるという文書が市役所内に回覧されました。この情報を活かすため

美杉の総合支所に確認したら、知らないとの返事ですごく残念でした。市が数百万円もかけて、美杉地域をアピールしたにもかかわらず、終わってしまったら、ロケ地であったことをどういうふうに活用するか発想してないと思えるのです。結局、津市東京事務所で取り組むことになりました。本来は美杉地域で受けた情報を神去村青年団に提供するか市の観光振興課、シティプロモーション担当に積極的に取り組むよう提言すべきだと思います。組織上、提言しにくい状況があったと理解していますが、民間ならチャンスとして動くのではないかと思います。

**質問 1** この映画の効果の中で、例えば林業を志す方が目に見えて増えた、地元の子たちで林業に興味を持つ人間が増えたというような、目に見えて変わったという変化があれば教えてください。

**回答 1** 今の職が水産振興室で現場を離れておりますのでわかりにくいですが、はっきり言って「ない」と思います。映画を観た人たちの中で林業をしたいという思いになった人は少なかったと思います。ロケ地ガイドをした人、青年団の人たちといろいろ話をしましたが、そういう人はいなかったようです。青年団とは別にエキストラで出演した裸の男たちが「ふんどし会」というチームをつくっていますが、彼らも自分たちの出た映画をヒットさせたいと動いてくれましたが、彼らが林業をやりたいとは思わないようです。県、市の林業関係者にも聞きましたがこの映画を観たから、あるいはどうしたら林業を勉強できるかという問い合わせは少なかったと聞いています。森林組合では林業体験希望者を受け入れる制度はあるようですが、実際少ないようです。やはりそこには収入がどうか全然見えてこない。特に個人でやる林業は難しく、森林組合や林業関連企業に勤めるという方法はあるにしても、自分が山に入って、植えて、手入れをして、伐採して、製材するという流れのどこかの場面で働きたいというのはあるかもしれませんが、数は少ないと思います。最初に言いましたが、この映画のテーマは林業振興、担い手育成というところにはつながっていないと思っています。

美杉の森林組合は、技術指導など多様に関わってくれましたが、実際の林業振興には難しいという話も聞かせていただきました。ただ、森林組合に勤める若者は映画撮影を喜んでいました。テレビのインタビューで、林業についてどう思うか聞かれ、スター扱いに照れていました。

**質問 2** この映画の素材を森林組合など地元への U ターン、I ターンに使ったりすることはできたので

すか。いろいろ著作権、版權ということで難しかったのでしょうか。

**回答 2** 本当にそうです。今から各地域の映画館のないところへ DVD を持って行って、流してほしいと思っていますが、版權の問題とか出てくるでしょう。できればそれぞれの地域の中で若い人たちや、小中高校教育、また社会教育、公民館事業の素材として、利用していただければいいと思います。この映画は、時代、流行に関係なく観てもらえると思います。だから来年でも、どこで観てもらっても新鮮に受け止めてもらえると思います。

**質問 3** 今日のタイトルは、映画ロケで山が元気になったというタイトルなんですけど、元気になったというのは、映画のロケとして受け入れたことで、関わった方が元気になったり、結果としてそれが具体的に次に何かに動き出すかもしれないということであると理解していますが、先ほどご質問があったように、結果として人が来たなどのループになったというものではまだないという理解でいいですか。

**回答 3** おそらく津市長も三重県知事もこれをきっかけに林業が見直され、林業に従事する若い者が増え、あるいは材木の需要が増えるなど、また木の家はいいというラストシーンに刺激され日本建築にしようというところまで、期待していると思いますが、ここまでつながるのはやはり難しいと思います。ただ、青年団やふんどし会に関わった人たちだけでなく、私の思いは、役所がこれをきっかけに次は何をしようかと企画していくべきと思っています。「WOOD JOB!」という映画はあくまで一つのきっかけです。電車のラッピングに市が 350 万円、県が 350 万円の計 700 万円支出し、記念館に 370 万円、ロケ地ツアーに 120 万円の税金を注ぎ込んでいるのですから、そのときだけ三重県、津市が賑やかになっただけではいけないと思います。

**質問 4** 映画が終わった後に、例えばいろんなロゴを使う、いろんな小道具を使うなど、普通はお話の中ではあり得ないという話は、ある種特殊な例と思いますが、どういう状況で出てきたのか。もう一つは、神去村青年団は地元の村おこし仕掛け人みたいな人がトップになってできたという話がありましたが、それは自然発生的に地域から出てきたのか、そこもいろんな仕掛けがあって出てきたのか教えてください。

**回答 4** 私自身がしたかったのです。もし皆さんが、映画を設楽町で撮りたいので現場案内してほしいと言われたときに、どこまで皆さんが関わるかということ。私は市役所だからでなく、好きだったか

らです。私の協力でいいものを作ってくれるのならいいし、いいものを作るために、監督、スタッフ、出演者が、一生懸命になってくれるならいいという気持ちがありましたし、もう一つは、美杉に、自分の家も含めて、たくさんの人が来てほしいという思いがあったからです。合併したときの観光振興課という職場も、合併前に旧津市役所の商工観光部から、観光振興に行きたいと書くようにと、ドラフト1位みたいな形で言われておりましたので、そこで5年間携わった部分もあります。自分のためではなく、ロケ地ツアーも、記念館をつくることも、Tシャツをつくることも、直接は関係なくても、何かできることはないかと思っていました。ロケ現場に行って写真を撮っておいたらよかったと言いましたが、こんな写真だけじゃなくて、もっといろんな写真が撮れるのです。応援してくれている人たちの写真、見物している人たちの写真も、本当はもっと撮れているにもかかわらず、市役所が動いていないのです。映画に支援をしていくのは観光振興課なのか、広報課シティプロモーション担当が本来すべきなのか、整理されていなかったからです。私の立場は、スタッフ扱いなので、撮影風景写真は一切撮ってませんし、出演者のサインも持っていません。

「青年団」については、撮影に関わった人たちが撮影後、公開まで大体1年かかるので、何か抜け殻のようになり、何か出来ることがないのかと言ってきたときに、私は何とか思いを形にしてあげたいと思いました。神去村役場として、何かしようと言っている人がいたので、これをまとめるのには、何か核になるものが要ると思い、監督に、この思いの人たちを「神去村青年団」と命名していただきました。青年団として活動する知恵を絞ったり、自分たちでガイドツアーの順番を組んだり、「WOOD JOB!」シールを手作りし、来訪者にプレゼントしたり、小さな御神木切り体験をさせたり、団員がそれぞれ工夫して、お金は県から全部出ていますが、その企画はすべて青年団がしました。私は「青年団」をつくるどころまでは先頭に立たせていただいてきましたが、活動については、市役所の動向を伝え、ヒントを提供した程度です。市役所の役割はそれだけでいいと思います。せっかく住民主体で育ったものを駄目とか、市役所がこう言ってるから、こうしろというのは駄目です。この間も「神去村の御神木を引っ張り出して、花火大会会場に持っていき、それを松明に見立てて、花火に点火する企画でやっていきたいけど、神輿にする金がない。」と相談を受け、私は「その企画なら市役所に言えばいい」とアドバイスしました。私ができるのは後ろからの支援です。私は、仕掛けやアドバイスという裏方的な役割をし

した。

**質問 5** きっと田中さんのような人が東三河でもいると思うので、そういう人たちがもっと暴れていただくと、この地域ももっとおもしろく、海を隔てて津とこちら側でお互い合戦みたいなのがあればいいと思っています。

**回答 5** 2008年、「津の街音楽祭」というのを企画、実施しました。ある方の1000万円の寄付金で津を元気にする事業をするということで、私のアイデアが採用されました。津の街音楽祭とは、津市からスターを誕生させるコンテストとして、優勝したら100万円を贈るとしました。それで、大阪や名古屋のストリートミュージシャンに、声をかけて、開催されれば出場したいという人には連絡先を聞き、また楽器店などには、やっている方があったら紹介してくださいと、もちろんプライベートで行きました。津という街で音楽祭があって、そこで優勝したスターの卵たちが、実はこんなきっかけでプロになったと言ってほしかったのです。2015年3月に8回目を持って終わりました。第1回では、埼玉や宮崎などから100人くらい応募があって、終わった時は、出場してくれたことに感激し泣きました。仕事は面白がって取り組むと楽しいです。あと2年弱で定年ですので、定年後は三多気の桜や藁葺き屋根をベースに楽しいことをしたいと思っています。いずれまた皆さんにお会いして、いろいろなこと、参考になるようなことを教えていただけるといい思いもありまして、こちらのほうへお邪魔させていただいた次第です。